

症 候 学

科目責任者 青 木 琢

学年・学期 4 学年・前期

I. 前 文

これまで各疾患毎に学んできた知識は学生諸君の「知識の引き出し」に納められてきたと思う。この知識の引き出しから常に必要な知識を取り出し、問題を解決する能力を取得することが臨床の間では大変重要である。この科目では、各疾患単位で学んできた知識を症候の面からもう一度見直すことにより、問題解決の能力を育成することと臨床実習に必要な基本的診療能力を学習することを狙っている。

「医学教育モデル・コア・カリキュラム」に従えば、P.91～92 表5「主要症候」をほとんどすべてを網羅し、臨床実習の準備的な学習を含んでいる。

II. 担当教員

内科学（心臓・血管／循環器）	（豊 田 茂）	内科学（消化器）	（入 澤 篤 志）
内科学（血液・腫瘍）	（今 井 陽 一）	内科学（腎臓・高血圧）	（頼 建 光）
内科学（脳神経）	（鈴 木 圭 輔）	内科学（内分泌代謝）	（麻 生 好 正）
内科学（呼吸器・アレルギー）	（仁 保 誠 治）	内科学（リウマチ・膠原病）	（池 田 啓）
小児科学	（白 石 秀 明）	皮膚科学	（井 川 健）
整形外科	（種 市 洋）	眼科学	（河 越 龍 方）
泌尿器科学	（釜 井 隆 男）	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	（中 山 次 久）
産科婦人科学	（三 橋 暁）	救急・集中治療医学	（和 氣 晃 司）
産科婦人科学	（成 瀬 勝 彦）	外科学（下部消化管）	（水 島 恒 和）
埼玉医療センター・消化器内科	（玉 野 正 也）		
埼玉医療センター・脳神経内科	（宮 本 智 之）		

III. 一般学習目標

信頼される医師を目指し、臨床の場に則した能力を得る。

IV. 学修の到達目標

この科目は3部分より構成されている、即ち、1）症候からのアプローチ、2）診療の基本となる技能、3）基本的診療知識。それぞれの目標について掲げると、

- 1）症候を理解し、症候から患者の状況を把握出来る。
- 2）臨床実習に必要な基本的知識、即ち、エックス線その他画像診断、輸液、輸血、心雑音など、臨床の間で直ちに必要となることを身につける。

V. 授業計画及び方法 *（ ）内はアクティブラーニングの番号と種類

- （1：反転授業の要素を含む授業（知識習得の要素を教室外で済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態。）
2：ディスカッション、ディベート 3：グループワーク 4：実習、フィールドワーク 5：プレゼンテーション
6：その他）

回数	月	日	曜日	時限	講 義 テ ー マ	担 当 者	アクティブ ラーニング
1	5	13	火	3	関節痛・関節腫脹、腰背部痛、運動麻痺・筋力低下	整 形 外 科 学 稲 見 聡	1

回数	月	日	曜日	時限	講義テーマ	担当者	アクティブ ラーニング
2	5	14	水	2	皮疹, 粘膜疹	皮膚科学 井川 健	1
3		14	水	4	動悸, 脈拍異常, 胸痛, 息切れ, チアノーゼ, 呼吸困難, 失神	日光医療センター・ 循環器病センター 大谷 直由	1
4		14	水	5	小児の症候 (1)	小児科学 奥谷 真由子	1
5		14	水	7	蛋白尿, 浮腫	内科学 (腎臓・高血圧) 藤 乗 嗣 泰	1
6		16	金	2	高次脳機能, 頭痛	内科学 (脳神経) 鈴木 紫 布	1
7		16	金	3	視覚障害	眼 科 学 河 越 龍 方	1
8		16	金	4	貧血, 出血傾向, リンパ節腫脹	内科学 (血液・腫瘍) 佐々木 光	1
9		16	金	5	聴覚障害, 平衡障害, 咽・喉頭の異常, 嚥下障害	耳鼻咽喉・頭 頸部外科学 深 美 悟	1
10		19	月	2	発熱	内科学 (リウマチ・膠原病) 前澤 玲 華	1
11		19	月	3	呼吸困難, 喘鳴	内科学 (呼吸器・アレルギー) 奥 富 泰 明	1
12		19	月	4	咳・痰, 咯血, 血痰	内科学 (呼吸器・アレルギー) 清 水 泰 生	1
13		19	月	5	腰痛, 血尿, 尿量や排尿の異常	泌尿器科学 木 島 敏 樹	1
14		20	火	1	倦怠感, 肥満, るいそう	内科学 (内分泌代謝) 城 島 輝 雄	1
15		20	火	2	食思不振, 悪心・嘔吐, 胸やけ, 吐血	内科学 (消化器) 田 中 孝 尚	1
16		20	火	3	意識障害・麻痺・不随意運動・けいれん	埼玉医療センター・ 脳神経内科 宮 本 智 之	1
17		21	水	1	腹痛, 腹部膨満, 腹水, 黄疸	埼玉医療センター・ 消化器内科 曾 我 幸 一	1
18		21	水	2	月経異常, 性器出血	産科婦人科学 久 野 達 也	1
19		22	木	4	腹痛, 便秘・下痢, 下血	外科学 (下部消化管) 中 村 隆 俊	1
20		22	木	5	小児の症候 (2)	小児科学 佐 藤 雄 也	1
21		23	金	2	ショック, 脱水	救急・集中治療医学 和 氣 晃 司	1

VI. 評価基準 (成績評価の方法・基準)

出席についてチェックを行い, 出席率は受験資格の要件とする。評価は, 各担当領域の教員の出題の試験により行う。
60点以上を合格とする。

なお, 定期試験問題内の英語問題は「医学英語IV」の評価として集計される。

VII. 教科書・参考書・AV資料

各症候に登場する疾患については, 各臓器別の教科書に立ち戻って学習させたい。

VIII. 質問への対応方法

各講義への質問は各講義担当者が個別に受け付ける。

IX. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

*◎：最も重点を置く DP ○：重点を置く DP

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）		
医学知識	人体の構造と機能、種々の疾患の原因や病態などに関する正しい知識に基づいて臨床推論を行い、他者に説明することができる。	◎
	種々の疾患の診断や治療、予防について原理や特徴を含めて理解し、他者に説明することができる。	◎
臨床能力	卒後臨床研修において求められる診療技能を身に付け、正しく実践することができる。	
	医療安全や感染防止に配慮した診療を実践することができる。	
プロフェッショナリズム	医師としての良識と倫理観を身に付け、患者やその家族に対して誠意と思いやりのある医療を実践することができる。	
	医師としてのコミュニケーション能力と協調性を身に付け、患者やその家族、あるいは他の医療従事者と適切な人間関係を構築することができる。	
能動的学修能力	医師としての内発的モチベーションに基づいて自己研鑽や生涯学修に努めることができる。	○
	書籍や種々の資料、情報通信技術（ICT）などの利用法を理解し、自らの学修に活用することができる。	○
リサーチ・マインド	最新の医学情報や医療技術に関心を持ち、専門的議論に参加することができる。	○
	自らも医学や医療の進歩に寄与しようとする意欲を持ち、実践することができる。	
社会的視野	保健医療行政の動向や医師に対する社会ニーズを理解し、自らの行動に反映させることができる。	
	医学や医療をグローバルな視点で捉える国際性を身に付け、自らの行動に反映させることができる。	
人間性	医師に求められる幅広い教養を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	○
	多様な価値観に対応できる豊かな人間性を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	○

X. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

分野が多岐にわたるので、各科の先生にゆだねます。フィードバックは課題による。

XI. 求められる事前学習、事後学習およびそれに必要な時間

各レクチャー後指示をあおいで下さい。（所用時間の目安20分）

XII. コアカリ記号・番号

シラバス別冊に記載。なお、シラバス別冊に記載が無い場合、要点を確認しておくこと。（所要時間の目安20分）